論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	南　玉瓊（なん　ぎょくけい）
○学位の種類	博士（国際関係学）
○授与番号	甲　第 1219 号
○授与年月日	2018 年 3 月 31 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	非伝統的居住地域における朝鮮族コミュニティの研究 ――社会的・経済的資源の相互依存の視点から
○審査委員	（主査）中川　涼司　（立命館大学国際関係学部教授） 南野　泰義　（立命館大学国際関係学部教授） 宮島　美花　（香川大学経済学部教授）

＜論文の内容の要旨＞

本論文は、中国朝鮮族が、その伝統的居住区（吉林省・黒龍江省・遼寧省・内蒙古自治区）から、その他の非伝統的居住区に移住した後に、移住先の地で形成するエスニック・コミュニティが、どのような要因でもって形成、維持されているのかを明らかにするものである。地縁・血縁があり、また、政府の少数民族自治政策によっても守られている伝統的居住地域においてエスニック・コミュニティが弱体化している中で、それらの条件のない非伝統的居住地域においてはエスニック・コミュニティは形成すらされないことが予想される中で、なぜエスニック・コミュニティが形成、維持されたのか。それを解く鍵として、「社会的・経済的資源の相互依存」および韓国という国際要因が挙げられる。つまり、非伝統的地域では政策的支援が弱いため、経済団体が運動会や学校など社会的紐帯を強化する支援を行い、また、逆に、社会団体のそれらの活動が、経済的紐帯の強化にもつながるという循環が発生していること、また、そこに、韓国の企業や学校の存在が大きく関与していることが、その答えである。

これらの答えを導く理論としては、先行研究におけるギアーツなどの原初性論からは原初的愛着の存在を、ブラスなどの用具論からは利害関係の分析を、スミスなどのエスニック・シンボル論からはシンボルの利用を理論枠組みとして継承し、また、マッキバーのコミュニティとアソシエーションの概念から、エスニック・コミュニティにおける「団体」の概念を引き出し、分析に組み込んでいる。

また、中国朝鮮族の中国国内移動とコミュニティ形成に関わる先行研究に関しては、

経済団体と社会団体との連携や、エスニシティの経済資源化、韓国との関わりなどについて明らかにしているが、学校の役割を見ていないことによる社会資源の評価の不足および単一地域しか見ていないことによる普遍性の不足があるとしている。
これらの分析枠組みの下、伝統的居住地域として黒龍江省ハルビン市の朝鮮族コミュニティ、非伝統的居住地域として深圳市、青島市、河北省燕郊鎮の朝鮮族コミュニティの詳細な分析が行われている。

序章では、上記の研究課題と分析枠組みの紹介検討が行われている。

第１章　「中国における朝鮮族の社会的位置」では中国における民族概念、民族政策（とくに民族区域自治制度と都市民族工作条例）、朝鮮族の国内分布、年齢層、比較 4 地域の朝鮮族の学歴分布、職業分布などが概観されている。

第２章　「ハルビン市朝鮮族コミュニティの変容―伝統的居住地域の事例」では、朝鮮族の伝統的居住地域であるハルビン市の朝鮮族コミュニティの性格とその変化についての分析が行われている。そこでは少数民族政策に従い、政府がコミットする形で民族学校が設立されているが、そこで行われるビジネスは漢族を相手としたもので、経済的資源と社会的資源の循環が起こっておらず、また、韓国は出稼ぎ先でしかなく、コミュニティ形成には大きな影響力は無いことが示されている。

第３章　「深圳市朝鮮族コミュニティの構築と維持―非伝統的居住地域の事例１」

第４章「青島市朝鮮族コミュニティの構築と維持―非伝統的居住地域の事例２」、第５章「燕郊鎮朝鮮族コミュニティの構築と維持―非伝統的居住地域の事例３」はそれぞれ、非伝統的居住地域である深圳市、青島市、河北省燕郊鎮の朝鮮族コミュニティの分析を行ったものである。そこでは、三つの地域の異同が検討されている。まず、深圳市は政府との関係が弱いが、韓国企業との関係が強く、社会的紐帯と経済的紐帯の相互依存関
係は形成されているが学校は週末学校に留まっている。青島市では、深圳市と比べると政府との関係は強いが城市民族工作条例に基づくもので、自治権までを持つものではない。韓国とは学校レベルでも企業レベルでも関係が強く、ここでも社会的紐帯と経済的紐帯の相互依存関係が見られる。燕郊鎮でも同じく城市民族工作条例に基づく政府との関係があるが、韓国との関係は中程度で、それでも社会的紐帯と経済的紐帯の相互依存関係が見られる。したがって、政府との関係と韓国との関係に強弱はあるが、総じて言えば、伝統的居住地域の自治権に基づくような政府の強い力は無く、韓国との関係がコミュニティ形成に積極的に作用するなかで社会的紐帯と経済的紐帯が相互依存関係を形成していることが示されている。
以上のことから、終章においては政府の政策的支援の弱さと韓国との関係の強さから、社会的紐帯と経済的紐帯の相互依存関係が形成されたことが、一見するとエスニック・コミュニティが形成されそうにない非伝統的居住地域において朝鮮族コミュニティが形成・維持されている理由であるとの結論が導き出されている。

＜論文審査の結果の要旨＞

中国朝鮮族の移動とコミュニティ形成の研究は、韓国人研究者による在韓朝鮮族の事例研究が中心的役割を担ってきたことから、国際移動に関心が集中しがちで、国内移動の調査分析は手薄であり、その意味で本研究はその欠落を埋めるものである。しかも、エスニック・コミュニティに関わる諸理論および、中国朝鮮族研究の先行研究の批判的摂取の中から、社会的資源と経済的資源の交換というコミュニティ内部のメカニズム(ロ
ーカルなもの)、政府との関係（ナショナルなもの)、外国（とくに韓国）との関係(グローバルなもの)という、国際移動の分析にも使うことのできる普遍的枠組みで分析を行っており、中国国内の移動とコミュニティを扱った事例研究でありながら、国際移動を含む移動研究そのものにとって学問的貢献をなしえる成果となっている。また、中国朝鮮族の国内移動に関する先行研究が、一地域の研究にとどまっていたのに対し、条件の異なる複数の地点における現地調査を踏まえて、その共通点と相違点を議論しており、複
数地を対象としたエスノグラフィ研究として、学問的意義を確認することができる。また、文献も日本語、中国語、韓国・朝鮮語の資料を広く参照するなど fact finding としても価値が高いものである。

理論枠組みが帰納的なものか、演繹的なものかが分かりにくいという点はあるが、分析枠組みと綿密な調査に基づく fact と間に齟齬は無く、矛盾なく説明できていることから、本論文についていえば大きな問題とはならない。

戸籍制度など、中国の制度に精通していない読者にはやや説明不足な点もある。この点は今後公刊等を行う際に補っていくことが求められる。

今後の課題としては、本論文ではあえて取り組まなかった構築主義的視点、つまり、自己認識からの分析、国内の他のコミュニティの分析、研究対象とされたコミュニティのさらなる分析の深化（たとえば、ビジネスの内容に立ち入った分析など)、国際移動との異同の分析など発展の余地は大きい。

以上の諸点については、公聴会において口頭であらためて確認された。
審査委員の一致した見解として本論文は、博士学位論文としての学術的水準と形式要件を十分に満たしていると判断された。

＜試験または学力確認の結果の要旨＞

公開審査会は 2017 年 12 月 25 日（月）15:00～16:30 に諒友館 839 で行われた。そこでは博士論文の概要の説明の後に、審査委員 3 名による質疑応答が行われた。

質疑では上記の、帰納的分析か演繹的分析かという点についての質問がなされ、先行研究の理論を研究・整理しているが、理論に事実を当てはめたわけではなく、調査の中

で明らかにされた事実を論理的に説明できる理論枠組みを作ったもので、基本的には帰納的分析であるとされた。また、本研究であえて構築主義的方法をとらず、基本的には機能主義的方法を取った理由についても質疑が行われ、本論文を一貫したものとするために機能主義でメカニズムを説明し、構築主義的方法は今後の課題としたことなどが説明された。また、いくつかの点で説明不足や誤植等の指摘も行われた。

本審査委員会では、論文審査および質疑応答の結果、本学学位規程第 18 条第 1 項に該当することを確認し、南　玉瓊氏に、「博士（国際関係学　立命館大学）」の学位を授与することが適当であると結論された。